

# 見沼の自然と歴史・文化 1 見沼の成り立ちと歴史

181231③

平成31年1月12日午後1時30分 さいたま市民会館うらわ

青木 義脩

## はじめに

見沼という名称の沼は、今はないが約5500年はあった。その場所は、今の川口市の一部からさいたま市にかけてである。特別な沼というには、自然と歴史から迫ると、自然では、縄文海進の海退後に出口がせき止められてできた淡水湖である内水面であり、歴史的には、縄文人の生活を支えたこと、水下地域の灌漑用水沼であったこと、氷川女體神社の御手洗であったこと、本格的な灌漑用水沼にしたこと、そして干拓して消滅したこと、改めて洪水調節池にしていることなどである。埋め残しと言える水面や公園の中にできた水面があるので、見沼が全くないとは言い切れない。しかし、見沼といった場合には地域名であり、見沼代用水の内側は見沼地域という。八丁堤ないし見沼通船堀よりも北側にあたる地域である。見沼代用水も選地をしており、築越（つつこし）外の谷津田は見沼地域外かということ、自然的には旧見沼地域になる。1,200haよりは広がる。

## 見沼の位置と自然

見沼の位置は、行政的にはさいたま市見沼区、大宮区、浦和区、緑区それに川口市に属し、国土地理院5万分の一地形図では、『大宮』に完全に入る。地球上でみると見沼のほぼ中央と言える、芝川と加田屋川の合流点がほぼ東経139度42分06秒、北緯35度53分40秒になる。面積は、見沼代用水の内側で八丁堤より北側で約12.17km<sup>2</sup>と言えるが、これは享保期の見沼新田開発の面積は1,228町5反余をメートル法にしたものである。しかしこれは人工的な数値であって自然とは違う。築越外の谷津田を含め台地の裾を辿るとその面積は約16.12km<sup>2</sup>になる。抑々見沼の一周はという単純質問にも答えられない。ちなみに、見沼を囲む台地の裾を辿ってみたら凡そ55kmになる(ただし芝川上流と八丁堤下流が計算できない)。通例言われている35km(山手線一周は34.5km)よりは多くてしかるべきである。海岸線、湖岸線、沼岸線は長いほど多岐利用に有益である。見沼の中の現在の標高は、3~6m、台地の上は、14mほどであるが見沼区大和田に18.2mがある。

見沼低地は、沖積低地である。完新世に構成された地層が覆っている。芝川や加田屋川は自然堤防を作っていないので、見沼低地の地層はマコモなどの泥炭層である。一方囲む台地は洪積台地であり更新世に形成されたものであり、火山灰土である関東ローム層からなる。箱根や富士火山の火山灰土である。台地は開析され複雑な谷を作った。台地は舌に似るから舌状台地と言い、開析谷は木の枝のよう(樹枝状)に分かれている。この谷に、縄文海進と言われる奥東京湾の水が入り込み、見沼はいったん入江になった。約6000年前をピークとする。その後海退であったが、出口に利根川(荒川、入間川)の土砂堆積があり、閉塞され淡水湖(沼)になっていき、内水面としての地位を保つことになる。

## 後期旧石器時代の遺跡と生活

後期旧石器時代の今から 3 万年前近くから見沼周辺の台地上は人々の住むところとなった。見沼地域外になるが、南区大谷口の明花向遺跡では、今から 3 万年前の後期旧石器の遺物(石器と石材、剥片等)が見つかった。さいたま市では一番古い遺跡である。見沼地域になると、大古里遺跡、松木遺跡、宮本遺跡、北宿西遺跡、中原後遺跡、北宿南遺跡、南宿北遺跡、和田北遺跡、玄蕃新田本田遺跡、大和田高明遺跡、鷲山遺跡、中川貝塚内遺跡など驚くべき数の旧石器遺跡がある。三室地区になるとまさに一舌状台地一遺跡というくらいである。その時代は、氷河期、気候寒冷、海面はいまよりも 100m も低く見沼地域はもとより東京湾も陸化で数十メートルという谷が刻まれていた。台地上に人々は住み、猟をして生きていた。松木遺跡はいまから 2 万 5 千年前の遺跡で、発掘調査で、焼石、炭化物、石器、石器を作り材料、石クズなどが見つかった。明らかに生活をした跡である。

こうした遺跡が見沼周辺にいくつもある。掘ったから見つかったのであるが、ない所を掘ってもないから、元々遺跡が多いと言える。それは当時の生活環境がすぐれていたことになる。安全な台地の上に住み、崖を降り谷の水を飲みに来る動物を狙う、このような場所が見沼の谷とその周辺であった。

縄文時代は土器を作り、狩猟も弓矢を使い漁労をする時代である。今から 9 千年以上前が縄文時代早期の始まりであるが、今は草創期があり、1 万数千年前という数字を与えている。この時代の石器は見られるが、土器は緑区大崎のえんぎ山遺跡から出土している。見沼に近い遺跡である。早期初頭から松木遺跡や北宿西遺跡、和田北遺跡、会ノ谷遺跡などがあるが、早期末になると、貝殻を文様付けに使った土器が多数出て一般化する。海進が始まっていた。ファイヤーピットがどこでもつくられた。大古里遺跡はその代表格。100 ヶ所以上も見つかった。そして貝塚の時代になった。前期の黒浜式土器の時期から諸磯式土器の時期である。山崎貝塚(緑区)と中川貝塚(見沼区)はその代表格である。集落が形成された。この時は気候温暖であり海水面が上昇したのである。

## 縄文時代中期以降の拠点集落

馬場小室山遺跡は、見沼の谷から南に入り込む小入江の奥にある。縄文時代早期、前期(小貝塚を含め)もあるが、本格的には中期中葉から晩期最終末までの 2500 年以上の長きに渡る集落である。最終的には、環状盛り土遺構と言われるように、中央に窪地がありその周辺に土手上の盛り土があり、その中は竪穴住居跡が重なっている。こういう遺跡は最近多く見ついているが、その典型であり、縄文時代の起伏がそのまま残っている点では最高の遺跡である。それだけの長い期間の生活を支えたのは、見沼の内水面漁労、見沼に集まる野鳥、小動物、背景の雑木林の堅果類、根菜類などであろう。こういう遺跡は、他に浦和区木崎の前窪遺跡(後期以降)がある。また緑区大門の櫛谷遺跡は地形的には見沼の谷の奥になるが、ここも中期から後期にいたる縄文大拠点集落跡である。また奥地では氷川神社遺跡(大宮区高鼻町)が縄文後期の環状盛り土遺構を持つ。すべて見沼の水と背景の里山であろう。

## 初期弥生文化と水稻耕作・古墳時代

弥生時代中期になると、見沼周辺の台地上に集落が営まれた。土器型式では、宮ノ台式土器である。松木遺跡、上野田西台遺跡、大和田本村北遺跡、御蔵山中遺跡は著名である。見沼の縁辺で稲作を開始したその人々は、台地上に住んだのであろう。後期になり、北宿遺跡、馬場北遺跡、三崎台遺跡、鎌倉公園遺跡、上野田西台遺跡と続いていく。弥生時代の集落は時として環濠集落が見られるが、大和田本村遺跡、御蔵山中遺跡、北宿遺跡、馬場北遺跡などにはそれが認められた。防衛を必要とする村落形態が求められたのである。しかし、古墳時代に入り、特定の遺跡を除くと、集落は減り、むしろ、浦和区の上木崎東遺跡や緑区のタリ耕地遺跡、見沼区の鎌倉公園遺跡など上流の方に、僅かに遺跡が見られる程度になる。これは見沼の深化（水面上昇）による拡張で縁辺の耕作地が減少したためであろう。なお特定の遺跡とは、緑区の北宿遺跡と馬場東遺跡である。三室のうちであり氷川女體神社に近い集落ということになる。今は関連が問えない。

水が豊かなら、古墳時代には見沼は一大水稻耕作地帯であってよかつたはずであるが、享保の見沼新田開発を待つまで、見沼の地は立地的に水稻耕作が無理であった。水田域でなく沼沢地が進化したためである。

集落がほとんどない見沼周辺には古墳は営まれなかった。支配する豪族がいなかったのであろう。さいたま市とその周辺を見ると、古墳は荒川の流域に集中するか、綾瀬川、元荒川流域にしかない。その点、水下（すいか）の足立区には古墳がある。見沼の水が古墳を作ったということになる。

## 足立郡と水

足立郡は、武蔵国の一郡で北は旧吹上町（鴻巣市）、南は東京都足立区までであり、西に荒川、東に元荒川・綾瀬川が流れる。その中ほどに見沼があった。浅いが、この沼の水が水下すなわち見沼以南の村々を潤すことになっていた。それ故に足立郡は細長いのであり、一体性があつた。見沼の水は水下の人々の生命の水であつた。足立区内には古墳時代以降の遺跡がある。優れた水稻耕作地帯であり、それを支えたのが見沼であつた。

## 氷川神社・氷川女體神社の始まり

神社には社伝があり、それに従つて説明するのが常である。氷川神社（大宮区高鼻町）は、孝昭天皇の御代、緑区宮本の氷川女體神社は、崇神天皇の御代ということである。

足立郡のこと見沼のことを考えると、水稻耕作が始まったのちに産土神として崇め祀つたところが、引き続いて祭祀が行われてきたところが、神社の地であると言えば、説明ができる。出雲神の勧請は、筋書は容易であるが、史料に基づく論述は難い。見沼の水を安定して得たいと願つた人々は水下であつた。

氷川神社の故郷は、見沼である。武蔵国に250社もある氷川神社は、どう考えても見沼のほとりに発祥したと言える。それが西へ行つた。東には行かなかつた。南はというと、足立区にはとにかく多い。氷川は見沼の水ということはわかる。

但し女體は別である。船霊説を主張する研究者多い。スサノオ、クシナダ、オオナムチの三神は説明しやすい。氷川、女體、氷（火）王子三社鼎立も説明はしやすい。見沼を囲んでい



る古社である。ただ氷川女體神社だけが、参道もなく、階段を降りると沼の中に入る。

『新抄格勅符抄』にある天平神護 2 年(766)に封戸 3 戸を寄進したという氷川神は、どこを指すのか。氷川女體神社近くに馬場東遺跡、北宿遺跡に 6 世紀頃の集落跡がある。女體神社に近い集落である。この時期なら古墳があっても良いのにはないことは先に述べた。

### 氷川女體神社御手洗と御船祭り

芝川第一調節池工事に先立って行われた発掘調査で、下山口新田字四本竹地内で、約 800 本の竹が立ったまま見つかった。4 で割り 200 回、一年おきだと 400 年分の祭祀場跡ということになる。それは、御船祭りという氷川女體神社の、古来からの祭祀で舟遊びの神事とも言われた。享保 13 年 (1728) が最後なので、1328 年まで溯れることになる。この祭りが氷川女體神社の根本祭礼である。見沼が御手洗であり、見沼自体が御沼であることは言を俟たない。その祭具の一つ一対の瓶子は、14、5 世紀、元時代の牡丹唐草文瓶であり、神社に伝世している。

### 見沼溜井造成と八丁堤・荒川の西遷

関東郡代 (代官頭) 伊奈忠治は、赤山陣屋 (川口市) を築き、赤山領 7000 石を知行するとともに、約 30 万石の幕府直轄地 (天領) を支配した。江戸屋敷は、城内常磐橋門内であった。まさに大大名のさまであった。

忠治は、八丁堤を築き見沼を人造の溜井にした。面積にして 12 km<sup>2</sup>、中禅寺湖と同じである。寛永 6 年 (1629) でこの年に忠治は、いわゆる荒川西遷も行っている。

八丁堤は、長さが 8 丁あるからそう呼ばれる。実際には附島という自然の半島状の台地先端からで基部を含めると 1.1 km になる。堤の高さは約 2m であるが幅は 50m から 100m に及ぶ。低湿地、軟弱地盤位築いた堤、それが 100 年ももったのはその幅であろう。約 1,500 万トンの水の水压を押さえたわけである。

「見沼水いかり」という言葉は大切な語彙である。溜井造成による水没田発生である。

### 天久保用水

天久保用水は、今は、見沼代用水東縁用水路の上野田字天久保地内で分水し幅員 9 尺で進み、日光御成道を暗渠で潜り、綾瀬川の谷に出て寺山でさらに分水、幅員 6 尺で、野田、大門、戸塚 (川口市) に向かう。一方は幅員 3 尺で東に進み、伝右川を掛け渡井で渡り、綾瀬川を伏越で潜って岩槻区笹久保新田などの水田を潤す。このようになったのは、見沼代用水開削時で、それ以前は、見沼溜井の水を見沼区膝子地内で取水していた。近世初頭からの用水路として貴重である。延長 6 km、灌がい面積 328 km<sup>2</sup> である。

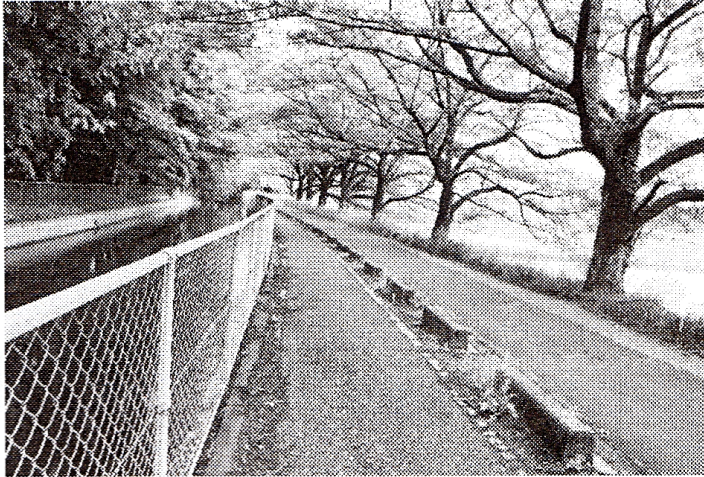
### 入江新田造成

入江新田の開発が、延宝 3 年 (1675) に幕府の許可で坂東家 (加田屋) によって行われたが、溜井の水不足をきたし、享保 3 年 (1717)、幕府は原状に復帰させた。52 町歩余である。締切堤以北で、現在の加田屋、加田屋新田、膝子などである。

### 見沼新田開発と見沼代用水開削

徳川吉宗の命を受けて、享保 12 年 (1727) から 13 年にかけて勘定吟味役格井澤弥惣兵衛

為永が担当して実施した見沼一連の模範的開発事業で、新田開発と用水路開鑿である。新田開発は1200町歩に及ぶもので、在来の見沼溜井を干拓し、水田化した。用水路は、在来見沼溜井の水を使っていた水下の8領の灌がいと新田の灌がいのために利根川から60kmにわたり引かれた。これらの工事は半年で終わった。代用水は丁場割、新田開発は村請で行った。検地は享保16年であった。



見沼代用水東縁と見沼田んぼ 見沼区膝子付近で 左が斜面林、道路は堤上  
典型的な片側崖、片側土手の例。崖先に沿って代用水は屈曲する。

### 見沼通船

見沼新田の年貢米を江戸に運ぶために内陸水運である見沼通船が享保16年に開始された。見沼代用水、芝川、荒川(隅田川、大川)を結ぶもので、代用水縁辺の村から官倉に年貢米が運ばれた。併せて、縁辺の物資と江戸の商品や肥料が運ばれてきて、内陸水運が栄えた。用水と芝川間の3mの段差を、閘門式運河で結んだところが注目される。見沼通船堀である。享保16年の開通である(国指定史跡)。



見沼通船堀 東縁 平成30年



## 野田のサギ山

かつて緑区大字上野田ほかに特別天然記念物野田のサギ及びその繁殖地があった。昭和59年、指定解除となった。5種類のサギ(ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギ)の営巣地であった。盛時には3万羽と言われた。このサギ山が始まったのは、今の、緑区上野田のうち、宝永地区(旧・新染谷村)で、名主守富家の屋敷林である。それが滅び南に移り最終的には上野田の一部に限られた。餌場面積の減少、農薬の使用、夜間の明るさ、交通量の増加などが考えられるが、餌場の減少が最大であろう。見沼田んぼの造成で始まったサギ山が見沼田んぼの畑作化で消滅したのは理の当然であろう。

## 見沼貯水池計画

昭和9年ごろ見沼貯水池計画が持ち上がった。これは東京市水道局が貯水池を新設する候補地に見沼を選んだというものであった。測量も開始したのですが、地元では反対運動が起きた。

## 見沼三原則

昭和35年の狩野川台風の際の見沼地域の治水能力に鑑み、昭和40年にいわゆる見沼三原則が埼玉県によって定められた。見沼田圃農地転用方針である。それは平成10年に「見沼田圃の保全・創造・活用の基本方針」と改められ現在に至る。

## 保全運動と対応

見沼は、開発か保全かと二者択一的な議論が多くなされた。土地所有者とその後継者の土地利用に関する考え方、農業継続の可能性を探る一方、首都圏に残された貴重な緑地という考えかた、根底にある治水機能維持などで、結論のないまま長い年月がかかっている。見沼のみでなく、景観を維持する斜面林の保全が具体的な問題として浮上した。

公益財団法人埼玉緑のトラスト協会が平成3年度にその第1号として買い上げたのが南部領辻から大崎にかけての見沼斜面林である。見沼代用水の外側の斜面で、約1kmに及ぶ。旧浦和市も購入資金を提供した。

## 芝川調節池計画

百年に一度の確率で起こるであろうと想定される洪水に対応できるよう芝川の改修、調節池整備が埼玉県によって進められている、第7調節池は完成しており、現在、大和田公園、大宮第2公園、同第3公園になっている。第1調節池は、見沼地域では最南端で、下山口新田字四本竹ほかの地域で、芝川を挟んで92.3haになる。

## 見沼の伝説

見沼には、竜神を主とした伝説が多い、國昌寺の開かずの門、その左甚五郎の竜彫刻、見沼に蓮を作らない禁忌、美女と馬子、見沼の笛などなど豊富である。見沼干拓での竜の処遇に関する伝説は多い。井沢弥惣兵衛に対する竜の抵抗、赤山陣屋での伊奈氏の関わりもある。干拓時に、竜は印旛沼に行ったとか、歩いて諏訪湖に行ったというものである。